



TITLE:

人文 第21号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第21号. 人文 1980, 21: 1-40

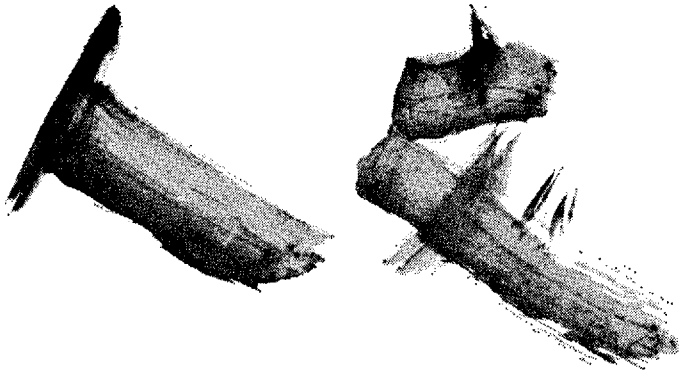
ISSUE DATE:

1980-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57147>

RIGHT:



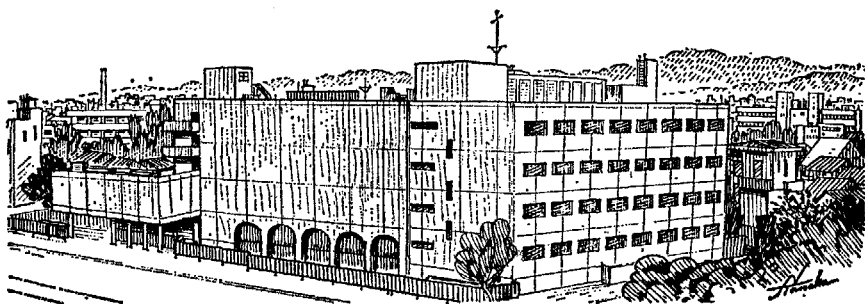
第 二 一 号

創立五十周年記念



1 9 8 0

京都大学人文科学研究所



人 文 第二号 創立五十周年記念

1979年6月—11月

も く じ

創立五十周年記念式典

所長挨拶・人文科学研究所五〇年の歩み……………河野 健二

来賓祝辞

岡本道雄氏・大平正芳氏（代読）・伏見康治氏・深井晋司氏・

貝塚茂樹氏

祝電

永井道雄氏・林田悠紀夫氏・松橋求己氏・パリ大学シナ学研

究所・フランス極東学院・藤枝晃氏

卓話（発声順）

数内清氏・坂田吉雄氏・桑原武夫氏・今西錦司氏・林屋辰三

郎氏

講演

夏期講座・宗教と社会

1 維新変革と神祇官の再興……………羽賀 祥二

2 イギリスからみた幕末日本の宗教……………横山 俊夫

3 琉球の宗教儀礼とそのシンボリズム……………松井 健

4 処道と神道と真道……………福永 光司

5 インド・チベット仏教学序説……………御牧 克己

6 イエスをめぐる神話的標識と性について……………谷 泰

創立五十周年記念講演・一九二九年（研究所創立の年を記念して）

1 ジョージ・オーウェルと三〇年代の

イギリス社会……………見市 雅俊

2 伊藤整と小林多喜二……………飛鳥井雅道

3 魯迅と郁達夫……………竹内 実

本のうわさ

河野健二編『フランス・ブルジョア社会の成立』（竹内・林

屋辰三郎編『文明開化の研究』（富谷）

書いたもの一覽（一九七九年六月—十一月）……………

人のうごき（31）おくりもの（31）お客さま（39）東洋学文

献センター講習会（40）感銘をうけた本（40）

カット田中重雄

人文科学研究所五〇年の歩み

河野健二

こんにち、京都大学人文科学研究所の創立五〇周年の記念日に際しまして、各界各地より多数の来賓、先輩、知友の御参会をいただきましたことは、私どもにとってこの上ない光栄であり、喜びであります。御列席の皆さまに深く敬意を表します。

京都大学人文科学研究所と称する研究所が創立されましたのは、実は今から五〇年前のことではなくて、四〇年前のことでございます。したがって、今年は創立四〇周年となりますわけですが、私どもの研究所は、その一〇年前に設立されました東方文化学院京都研究所のちの東方文化研究所を前身として含んでおります。私どもは、一〇年先輩にあたりますこの東方文化研究所を継承し、それと合体していることを重要とかがえ、かつ誇りに思っております。したがって、東方文化研究所以来の五〇年をここに記念する次第でございます。

ます。

さて、東方文化を研究する研究機関が京都につくられますについては、その発端は遠く一九〇〇年の北清事変にまでさかのぼります。このとき、義和団事件に關与して列国とともに中国に介入しました我が国は、その入手した賠償金を文化事業にあてることを適当とかがえ、東京と京都に、中国文化を研究し日中兩國の文化交流に資するための研究機関を設置することとなりました。その際、京都大学文学部を中心とする諸先学が、いわゆる京都シナ学の伝統を發展させてこられたことに對して、多大な敬意が払われたことはいままでもありません。京都にはぐくまれました中国学を無視して、我が国の東方文化研究は成り立ち得なかつたのでございます。北白川に新築されました僧院風の美しい建物を本拠としまして、狩野直喜、内藤湖南、そ



他の大先生と、その後、人文科学研究所のメンバーとなられました若い先生方が結集されたのでございます。

それから一〇年たちまして、ちょうど日中間の全面戦争がはじまって二年目のことでございますが、京都大学人文科学研究所という名前の研究所が設立されました。人文科学研究所は、中国の古典や歴史よりも、むしろ中国をはじめとするアジア情勢を解明するためにつくられたものであります。文化系の諸学部が共同で研究所をつくることを考えられ、それらの学部から人材が送りこまれました。しかし時局の動きにはきわめて急激なものがあり、人文科学研究所が中国の現状分析に着手するかしんないかのうちに、我が国は太平洋戦争に突入することとなりました。このため研究資料の収集や実態調査の便宜もえられなくなり、せっかくのアジア研究も十分な成果をあげるいとまをもつことができなかったものであります。

こうして、人文科学研究所の創立からさらに一〇年がたちまして一九四九年、すなわち

戦後四年たった時点で、研究所は決定的な転機をむかえることとなりました。戦後、時局や国策の要請から自由になりました研究所は、まず研究の目標を、世界文化に関する人文科学の総合研究に改めました。すなわち、研究対象を中国にのみ限定することなく、西洋や日本の研究をもとり入れ、また人文科学の分野での総合をはかることを明らかに目標としてかかげることにいたしました。ついで、文科系諸学部が共同で管理するという体制から研究所を独立させる、そういう気運がもりあがりまして、研究所の独立をはかり研究所の自治を確立することに成功いたしました。そして最後に、東方文化研究所との合併をはかり、研究員、蔵書、設備のすべてを人文科学研究所がひきつぐ一方、当時、西洋文化研究所と称しておられました旧ドイツ文化研究所からも施設および建物の寄付をうけることとなりました、ここに東方、西洋、日本の研究のすべてを含んだ新たな人文科学研究所が誕生したのでございます。

戦後三〇年におよびます人文科学研究所の



歴史は、ここに出発点をもったわけですが、これら一連の自己変革の果敢な推進者であられたのが、今はお亡くなりになりました安部健夫所長でございます。同所長のご苦心を改めて思いおこし、感慨を新たにいたします。戦後の人文科学研究所のあり方の基本線もまた、この時点で決定されたのであります。

その若干についてふれておきますと、まず第一に、私たちが研究所を研究者個人の仕事場としてよりも、むしろ共同研究と共同事業の場としてとらえたということがあげられます。中国古典の註釈、あるいは目録や索引の作成などは共同作業によって初めて成しとげられるものでございますが、こういう仕事は早くから東方文化研究所の固有の事業としておこなわれておりました。戦後は、それに新たに共同研究をつけ加えることとなりました。私どもの共同研究は、研究所内部の専門を異にする人たちが外部の専門家の応援をも求めまして、チームを組んで毎週一回、定期的に研究会を開催し、その成果を必ず公表

するという約束で始められたものでございました。最近よく言われます「学際研究」あるいは「プロジェクト研究」といったものを、私たちは戦後まもない時点から今日までつけてきたこととなります。共同研究のさまざまな成果について、ここでお話するいとまはございません。それとともに想起されますことは、共同研究の副産物あるいは共同研究の準備作業がさまざまな形をとってマスコミその他によって発表されたことでございます。このことも研究所にみなぎっておりました旺盛な所員の活動力のあらわれであったと考えております。

研究所のつけた基本線のうち、もうひとつの点をあげてみますと、助手の公募制ということがございます。これは一定の年限を決めました助手を全国の各大学から公募し採用するという制度でございます。大学の附置研究所がこういう制度をとって当該大学以外の出身者を採用することには異論もございましたけれども、結果としてこの制度は、多くの人材を養成して学会に送り出すことに貢献して



いるものと思います。この制度による助手に限らず、助教授、教授の方々でありまして、かなりの人数の方々が戦後三〇年間に研究所から転出されており、それらの方々が非常に立派なお仕事を数多くこなしておられる様子を拝見できますことは、私どもにとつて大変うれしく、また誇りに思っている次第でございます。

人文科学研究所は、現在一五の固有の研究部門と東洋学文献センターという付属施設と、なおあとひとつの客員部門をもっております。教官の総員は五二名、事務職員は三二名という大所帯でございます。研究所は世界有数の漢籍コレクションを擁しており、それを対象として国内国外の多数の研究者が研究に米ておられます。外国人の研究者も、常時二〇名ほどが文献センターを利用して仕事をしておられます。

所内の共同研究のプロジェクトも次第に数が多くなりまして、現在は二三をかぞえ、また研究所以外から毎週または隔週に研究所をおとずれて研究会に参加される方々は、現時

点で一八〇名を越えるという状況でございます。今日の研究所は、望むと否にかかわらず、国際的および国内的な人文科学研究のセンターとしての役割をはたしております。私たちの研究所は共同利用研究所という名前こそもっていませんけれども、その実質は共同利用研究所ではなからうかと考えております。しかし共同利用研究所でないため、予算や人員の上での困難も感ずることが多いことは否定できません。こういう問題を私たちが現時点でかかえておりますことについてもご承知おきいただきたいと存じます。

今日の研究所の盛んな状況を見るにつけても、諸先輩、関係諸機関、あるいは知己、友人の諸氏がどれほど私たちのためにご援助、ご協力をたまわったかを考えますと、まったく感謝のことばもない次第でございます。五〇周年に際しまして、私たちは力を合わせまして多少の企画を考えました。また今日の式典や展示等の行事を準備いたしました。私たちの意のあるところをおくみとりいただければ幸いです。





祝 辞

1

京都大学総長 岡本 道雄氏

本日、米賓各位をお迎えいたしましたして、京都大学人文科学研究所におきましては創立五〇周年の記念式典を挙行いたしました、輝かしい過去の業績をかえりみ、将来における一層の発展を期することになりましたことはまことに慶びにたえない次第でございます。

今もお話ございましたように、官制上、人文科学研究所の京都大学の設置は昭和一四年（一九三九）八月であります、その後一〇年たった一九四九年に既存の東方文化研究所と西洋文化研究所を、これも今ご説明のあったとおりでございますが、統合いたしました今日にいたったものでございます。これは人文科学系の大学附置の研究所としては、東大の東洋文化研究所とともに我が国においても最も古いもののひとつであります。

本日、創立五〇周年の式典をおこなうというのは、この三つのうち、昭和四年（一九二九）東方文化学院

京都研究所、のちの東方文化研究所の創立をもって、その創立の起源としているためであることは今も述べられたとおりであります、今日この一月九日というのは、北白川にある唯今の分館、当時の東方文化研究所の竣工日が昭和五年一月九日となっておりますので、これをとったものでありましょうか。昭和五年といえますと、まことに私事でございますけれども、私が三高にはいましたのが昭和六年でございますので、京都に上がってまいりまして北白川を歩いておりますときに、あのスペイン風のロマネスク様式の白壁の建物が目にしみるような気がいたしました。それを今まざまざと思い出しまして、あれからまさに五〇年たったのだという気がいたすのでございます。

この人文科学研究所が、その創立を東方文化研究所にとったということにつきましては、その両者の研究の実態、精神、学風というようなものから考えまして、まことに何もつともだと思えます。当時、東西両帝国大学を中心とします日本の東方学の峯々をなしていた東方学者が、かねて中国をはじめ東亜諸地域の文化を学問的とくに歴史的な立場から自由に研究できる機関を熱望しておりましたところ、一九二九年外務省をつうじて東京と京都に実現をみたのがこの東方文化研究所であります。

その創立の様子を『京都大学七十年史』でみてみますと、そのときの中心人物は東洋史の内藤虎次郎先生、中国文学の狩野直喜先生、東洋史の桑原隲蔵先生、地理学の小川琢治先生、天文学の新城新蔵先生、考古学の浜田耕作先生、東洋史の羽田亨先生などであります。私も、この名前を聞きますときに京都学派というものの発祥のころを思うのでありますが、当時の京都帝国大学の文学部、理学部などのきら星のような偉大な先生がすべて評議員に名をつらねておられます。

自由な研究ということで、これらの先生方を指導者とされまして、若手の研究者の方々が共同研究ということをもうすでお始めになりました。三カ年をひとつの期間としてひとつひとつのテーマにとり組んでこられたのですが、そのときすでに中国から学者をむかえてその指導をうけるほか、中国に留学するものもきわめて多く、また貴重な蔵書、資料を集めるというようなこと等が活発におこなわれまして、中国文化の学術的、歴史学的研究に情熱の限りをつくしておられました。このやり方を、その後一〇年たつて生まれまして人文科学研究所がそのまま受けついで今日に至っているということが手にとるようにわかります。

その後、今もお話がありましたように、人文科学研究

所では、時局の影響もあつて研究対象を東亜に限らず、世界文化の人文科学の総合研究といたしました。また終戦後にいたり、鳥養総長の時代に、前述の西洋文化研究所と東方文化研究所、三者を統合いたしました、ただいまの京都大学人文科学研究所となったわけでございます。したがって、こういう統合の結果、たいへん自然に本研究所のなかに東方部と西洋部、それに日本部というものが包含されて存在しているので

す。

およそ世界における文化の発祥と発展の過程をふりかえってみますと、西南アジアにおこりギリシア、ローマをへて西洋に発達した西洋文化と、インドと中国におこり我が国に伝来しました東洋文化とに大別されるわけで、それぞれの文化は内容、本質を異にしながらともに栄えてきたのですが、我が国におきましては、そのような西洋文化と東洋文化とが日本固有の文化と融合して、今日の固有の日本文化を形成してまいったのであります。

このように東西両文化を接取、消化して、これらの文化を融合、渾成して、より高い文化を創造した点におきましては、我が国ほど世界的にみて恵まれた国はないと存じます。またその研究ということになりますと、京都の土地がどれほど適当な土地かということに

も思い至るのでございます。

京都大学の人文科学研究所は、そうしたすばらしい目的を達成するために設置されたと申しても過言ではないと思われます。今申しましたように、東洋部、西洋部、日本部のこの三つの部がそれぞれそのような意味をもちまして、渾然と一体をなし現在の人文科学研究所を成しているのです。五〇年の歴史をふりかえりまして、各部門の共同研究のテーマの内容を追ってみますと、たしかにこうした方向をたどって来られたものであるという確信を深くいたします。

また同時に、近時、学間研究が過度に専門化しましたことの反省として、いわゆる学際的な総合研究体制、大学院をつくるときには総合大学院を、というようなことが言われておりますが、人文研五〇年の歴史は、まさに、この共同研究という総合研究を主体とした研究方法がもっとも有効な形でおこなわれております。この事実につきましては深く感銘いたします。このやり方についてはもう述べることはございませんけれども、各部において班を組んで所内、所外の多数の研究者によってひとつひとつのテーマをある一定期間でまとめいく、こういう研究方法と同時に各自も自己のテーマで研鑽にはげんでおられるわけであります。この研究の成果というものが高度のものであると

いうことは、その成果の多くが学士院賞、文化勲章等の対象となっている事実からも察知できます。

また海外研究調査も雄大なスケールでおこなわれております。カラコルム・ヒンズーキン学術調査とか、イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査、アメリカ類人猿学術調査など、規模の大きいものでは四年から六年にわたる大調査がおこなわれまして、これによってきわめて実証的なユニークな学問の分野を生んでいるのはご承知のとおりでございます。さらに創立以来、情熱をかたむけて集められました蔵書、資料などは東洋学文献センターにおさめられ、本邦の東洋学の宝庫をなしております。

このようにしまして、ここからはユニークな偉大な学者を多数各方面に産出したしております。しかしながら、この間、時代の変転があり、常にこの研究所がよい条件をもちつづけていたわけではございません。そのたびごとに、それぞれの困難を克服され、今日のこの偉大な研究所をつくりあげられました過去の諸先輩、研究所員の方々、また歴代の所長の皆さまに、私としましては、大きい感謝と敬意をささげるものでございます。

しかし、研究所として高いレベルを今後もなく維持すること、こういう研究所をながく継続していくと

いうことにつきましては、今後問題がないわけではございません。研究専一ということで、大学の教育からきりはなした欧州の研究所とは異なつて大学附置という形をとつております我が国のこういう研究所が、現在ご承知のとおり高等教育がめまぐるしく変貌をとげているのに対しまして、どうしてそのレベルを保つていくかというようなこと、また、この研究所は助手の公募という形をとつておられますが、すぐれた後継者を得るために大学院の充実をどうはかるかというようなことなど、今後ますます工夫と努力をかたむけてもらねばならぬ問題が、まことにたくさんあると思います。

私は幸い任期中に、昭和五〇年十一月、人文研の新館が落成いたしましたその式典にも逢うことができました。祝辞をのべるにつきまして、『京都大学七十年史』などを読み、本研究所がいかによい歴史をもつており、大切なものであるかということを知りまして、在任中できるかぎりその充実に努力してまいつたつもりであります。歴代所長のご努力と実力を文部省などにも充分理解していただきまして、現代中国、比較文化の二部門をふやすことができました。また過般は今西先生、桑原先生が文化勲章、文化功労者とおなりました、ともどもに隆盛な本研究所の実態をし

めすものであると、よろこびにたえない次第であります。

今や中国との国交も樹立し、そのために両国の学術交流もいよいよ本格化してまいりました。また先ごろ、パリ大学と本学との学術交流協定も成立いたしました。この東洋部、西洋部の発展は期して待つべきものがあると思いますが、日本部の興隆とともに今後ますますこの研究所が、日本における世界の人文科学研究の先頭に立つて栄えていくことをお願いいたしております。来たるべき一〇〇年の記念式典を想望し、心から声援をこめて私の式辞といたしたいと思います。

2

文部大臣臨時代理
内閣総理大臣

大平 正芳氏
(大崎仁審議官、代読)

本日、ここに京都大学人文科学研究所の創立五〇周年記念式典が挙行されるにあたり、ひとことお祝いの言葉を申し述べます。

京都大学人文科学研究所は東アジアに関する人文科学の総合研究を目的として、昭和一四年に創設されましたが、昭和二一年には、その目的を拡大して広く世界文化に関する人文科学の総合研究をおこなうこととなり、ついで昭和二四年には、東方文化研究所、西洋

文化研究所の両研究所を統合し、名実ともに人文科学の総合研究の中心としての地位を確立されました。

さらにその後、東洋学文献センターの付設、研究部門の整備、外国人学者の招致、施設の整備など、機構、内容の充実をくわえつつ、今日まで発展をつづけてこられました。この間、人文科学の分野において未発達であった共同研究の重視を方針として、学際的な総合研究を推進し、獨創性に富むすぐれた成果をおさめられ、また大規模な海外学術調査を実施するなど、多彩な研究活動を展開され、人文科学の発展に多大の貢献をしてこられたのであります。このような輝かしい伝統をもつ当研究所が、もともと古い母体である東方文化研究所の創設以来五〇周年を迎えられ、ここに記念式典が舉行されるはこびとなりましたことは、慶びにたえないところであります。

およそ人類文化の向上発展が、その基礎としての人文科学の進歩にまつところの大きいことは申すまでもなく、ことに今日のように科学技術の著しい発展や社会の変転動搖のはげしい時代においては、思想、文化、社会等に関する総合的な理解を深める人文科学の振興こそ重要であり、今後の当研究所の活動に対する内外の学界および社会の期待はまことに大きいものがあります。

ここに当研究所の歴史をかえりみ、先人の偉業に深い敬意を表し、現在までの発展をあらためて心からお祝い申し上げますとともに、所長および所員各位が今後その深い学識を充分に生かして、さらにたゆみない研鑽をつづけられ、研究所に課せられた使命を達成し、内外の研究者との協力を深めつつ、広く我が国さらには世界の学術の進展に貢献されることを心から祈念いたします。御挨拶いたします。

3

日本学術会議会長 伏見 康治氏

本日、京都大学人文科学研究所創立五〇周年記念式典が舉行されるにあたり、日本学術会議を代表いたしましてお祝いのことばを申しのべる機会をえましたことは、私の深くよろこびとするところであります。

現在の人文科学研究所は、昭和四年に東亜に関する産業経済、社会および教育、文化交渉史の三部門からなる研究体制をもって設立されました旧人文科学研究所を中核として、昭和四年に設立された東方文化研究所、その後設立の西洋文化研究所を統合し、それぞれの業績を継承して、世界文化に関する人文科学の総合研究を行なうことを目的に、昭和二四年に再発足した

研究機関であるとうかがっております。以来、幾多の試練を経ながら先人、諸先輩の心血をそがれました御努力と御研鑽により、一五の部門にわたる調査研究の充実、多数の貴重な資料の収集、蔵書の整理を果たされ、人文科学に関する学際的な総合研究体制を確立されました。とくに貴研究所の研究体制のあり方として、共同研究を重視され、その上さらに個々の独創的研究をも助長されていることは、その数々の業績が我が国のみならず、世界の学界に高く評価されるに至ったひとつの根拠でありましょう。これらの業績は、ひいては人類の福祉、社会文化、政治、経済のあり方にいたるまで、多大の影響を与えているところでございまして、心から敬意を表する次第であります。

我が国の歴史の過程における社会構造、発展の状況およびその世界各国との比較の問題、また多くの世界的な社会の難問題に直面している今日、これまでの研究員諸賢の真摯な御研究の数々が現時点で貴重な意義をもつものであることが痛感され、今後の貴研究所への期待はますます大なるものと存じます。

私ども日本学術会議におきましても、東洋学その他の人文科学関係の研究連絡委員会をもち、国内科学者の研究連絡をはじめ、国際学術団体への加盟、関係部門の国際会議およびシンポジウムの開催、またはその

後援などにより、国際的な研究情報の交換、討論を行うじて、これらの部門における研究の推進に努力をはらってまいりました。とくに昭和三十七年五月には「人文・社会科学振興のために、人文社会科学、総合研究機関の設置について」を政府に勧告いたしました。その表われの一環として、学術情報体制の整備、各専門分野における学術資料の完全収集、研究者の共同利用に供することを構想とした東洋学文献センターが貴研究所附属施設として開設され、東洋学に関する学術情報活動が活発にすすめられておりますこと、まことに御同慶の至りに存じます。私ども日本学術会議としては、今後とも皆様とともに学術の進展のため、なお一層の努力をして参りたいと存じますので、何とぞ御協力下さいますようお願いいたします。

おわりに、人文科学研究所がここに輝く五〇周年を迎えられたのを契機として、諸先輩の残されました多くの御功績を生かしつつ、新たな飛躍を果たされ、さらに多くの業績をあげられますよう心から期待してお祝いの言葉といたします。

4 東京大学東洋文化研究所長 深井 晋司氏

本日は京都大学人文科学研究所の創立五〇周年記念

の式典が挙行されることになりました、まことに慶賀にたえません。

五〇年という歳月は、ひとりの人間にたとえてみますと、生まれたばかりの人間が学校を卒業し、社会人となり、まさに働きざかりの年ごろとなるというところでありましょう。それが叡知、碩学を集められての五〇年なのでありますから、実に輝かしい研究成果の数々をこの五〇年に遺されたわけであります。私自身、自分の専門分野について数々おしえられることが多く、今日にいたっております。

私は、司会の方から今もご紹介のありましたように、東京大学東洋文化研究所からまいりましたが、現在、私どもの研究所にも附属東洋学文献センターがございまして、京都大学人文科学研究所とは密接な関係をもっています。私どもの文献センターでは漢籍の収集、整理などを事業といたしておりますが、京都大学人文科学研究所は常に私どもの先輩格として、人文系研究所の中心的役割を果たしてこられました。

今日、大学をとりまく社会環境はきわめて複雑であります。研究に対する要請も多事多端であります。研究所というところは、学部におけるように講座やカリキュラムにしばられることが少ないのですから、本来の研究がさらに深められることはもちろんであります

が、研究の流動化、共同化という新しい形で研究分野を広げることも、私どもに課せられた課題のひとつであらうと思っております。ここに私は、同じ人文系の国立大学附置研究所として相共に手を携えていきたいものと考えています。

創立五〇周年記念式典を機会に、京都大学人文科学研究所のますますの御発展を願ひ、私の祝辞といたします。

5

京都大学名誉教授
当研究所名誉所員

貝塚 茂樹氏

私、京大人文科学研究所の前身のひとつである東方文化研究所以来の所員として、この多数の英才が雲のごとくおこつて着々と業績を発表し、一代の盛儀を現出しておられる人文科学研究所が五〇周年を迎えられたことについて、非常に感激をもち、このようにご祝辞申し上げることは大変の光栄だと思っております。

ただ、私も少し書いて用意してきたのですけれども、河野所長やその他の人々の簡にして要をつくされた式辞に、もうひとつ屋上に屋を架してもしかたがありませんので、研究所在任当時を回顧して、人文科学研究所の学問の淵源をかえりみてみたいと思います。

所長その他の方々が申されたとおり、この人文科学

研究所の前身のひとつである東方文化研究所は、義和団事件の賠償金を資金とした外務省の東方文化事業部から援助をうけて発足した団体であります。ですから、さきほども総長の申されましたロマネスクの、現在の国立大学ではとても他に見られないような趣向をこらした建物、その他いっさいの図書の中のもののは全部、つまり中国からの贈り物であったわけです。ですから私どもは、この贈り物に対してどのようにして応えるかということを、いつも心の底にいただいております。

そのひとつは、こういう立派な建物、完備した書庫、そのなかの書籍、そういうものはどうしてできたのかということをいつも感じてきたのです。

中国と日本が、満州事変以降、国交が次第に悪化していき、ついに蘆溝橋事件以後の日中戦争に迫りこまれ、さらに太平洋戦争に発展していくわけでありましたけれども、学者としてできるだけそういう政治的な情勢にわずらわされずに、ある一定の限度内で研究をつづけようと、皆そう思っていました。その結果として、時局に便乗しなかったがために義和団事件の賠償金は軍部によって流用されてしまい、研究所は今までのような潤沢な補助をうけることができなくなりました。そういう時局のなかで、可能な限りの学術的研究

を継続してきたということは、今から考えてみると、不幸であつたし、それがまた幸福であつたというような気がします。

新中国ができましたときに、五四年、私は安倍能成先生を団長とする第一回の学術訪問団にくわつて中国を訪問しました。そのときは、今の学士院長、かつての日本学術会議の会長であつた和達清夫さんがすでに一員としてくわつておられました。そして昔から多少懇意であつた中国科学院院長であつた郭沫若先生などにもお会いして、まだそのときは国交回復はできていませんでしたが、できるだけ国交が回復されることを期待しながら学術交流につとめてきたのであります。

こういう精神は現在の人文科学研究所にも継承されていまして、文化革命の嵐が吹きあれていた中国でありましたが、その余波がまだおさまりにくい点で、そのときの所長の河野健二さんを団長として人文科学研究所は訪問団を組織しました。そしてまたそのおかしさとして、北京大学の訪問団を独立で招聘いたしました。このように、かつて私も東方文化研究所のいっていた願望が着々と現在の人文科学研究所で実現されているということは、当時の一員として私も、会心のことと存する次第です。

しかし昭和二四年以降あらたに生まれかわりました人文科学研究所のなかにはいった東方は、中国との学術交流をさらに深めていくことのほかに、やはり広く世界の学会と連絡をたもつということもまた非常に重要な責務でありました。こういう点につきましても、私どもはたえず東方文化研究所が学外にあつて、大学にとつて一種のアウトサイダーであつたということを感じます。たぶん、それは研究所の運営を非常に困難にすることになりましたけれども、このアウトサイダーの精神が人文科学研究所のなかに生かされて、今日の隆盛をむかえられることになつたのではないかと思つております。

今日、五〇周年にあたりまして、この研究所を創設され所長におなりになつた狩野直喜先生をはじめとして内藤湖南先生のご恩を今も忘れることはできません。この機会に皆さまとともに往時を追懷して、新しい出発の基礎となれと思います、このようなあいなつをいたしました。どうもおめでとうございました。

祝電

「助手時代の古巣がなつかしく、諸先生に感謝します。五〇周年おめでとう」。永井道雄氏

「京都大学人文科学研究所の創設五〇周年をお祝い申し上げますとともに、皆様の一層の御活躍をお祈りしてやみません」。京都府知事林田悠紀夫氏

「創設五〇周年を心よりお慶び申し上げますとともに、研究所の今後ますますの御発展と業績の実り多いことを祈念いたします」。京都市長船橋求己氏

CHALEUREUSES FELICITATIONS DES SINOLOGUES FRANCAIS POUR CINQUANTENNAIRE JIMBUN ET VOEUX SINCERES INSTITUT DES HAUTES ETUDES CHINOISES PARIS (ソリ大学シナ学研究所)

FELICITATIONS SINCERES CINQUANTENNAIRE JIMBUN ECOLE FRANCAISE EXTREME ORIENT PARIS (フランス極東学院)
FELICITATIONS POUR 50EME ANNIVERSAIRE FUJIEDA AKIRA PARIS (藤枝晃)



卓 話

1

藪内 清氏

研究所が設立されました昭和四年、一九二九年は、私が京都大学を卒業した年であります。きのうの朝日新聞に、研究所には奇人が多い、変わった人が多い、ということが出ておりました。私は奇人ではないつもりですが、京都大学の理学部の、それも宇宙物理学科を出まして研究所にはいましたので、やはり変わり種のひとりだと思わけます。

京都大学の理学部を出しましたもの、ことに数学、物理学の連中が同窓会をつくりましたが、その同窓のなかには、湯川さんとか朝永さんなどという方もおられました。狩野先生から稔誼会という名前をもらいまして、年一回ないし二回あつまっております。今年はちょうど五〇年にあたるということで、ひとつ盛大な集りをやろうと思っていたのですが、亡くなった人も、また病氣中の人もおりまして、ついにその集まりをやる事ができなかったのであります。ですから今日の日は、私の卒業の記念、それから研究所五〇年を

かねる式になるわけでして、二重のよろこびであります。

さきほどご紹介がありましたように、私は一九三五年に東方文化学院京都研究所にはいりまして、それから一九六九年まで三四年間、研究所におったわけがあります。私の仕事というのはすべてこの研究所でおこなわれているのでして、研究所に対して限らない恩義を感じておる次第です。

三四年間をふりかえりますと、いろいろな思い出があります、もともと強烈な思い出は、戦中から戦後にかけての数年でした。戦中には東方文化研究所は大東亜省という戦時中につくられました省の管轄下にはいつておりましたが、昭和二〇年をもって補助金をもらえないという事態になったのです。いわば存亡の危機をむかえたわけでありました。それは何とかして切り抜けましたが、戦後インフレがすすむにつれて、わずかな助成ではやっていけないという、また二度目の危機をむかえたのです。当時の所長の羽田亨先生は民間から寄付金をあつめてどうにかこの研究所を維持しておられたのですが、それもできなくなりました、ついに昭和二十三年に京都大学に合併されることになったのであります。

しかし、羽田先生は必ずしもその合併を望んでおら

れなかったふしが見えます。羽田先生は民間団体で自由な研究をできる研究所、そういうものを心に秘めておられたのではないかと思われます。こういう研究所が民間団体として自由にやっていくということは、日本の現状では到底できないことでしょうが、私は、さきほども貝塚さんが言われましたように、一種のアウトサイダーとして活発な研究をしていくことが非常に大事なことだと思ふのであります。アウトサイダーという言葉の代りに新鮮さを絶えず保つ野性といつてもよいかと思ひます。国家の手厚い保護の中で安心しきつてはならないと思ひます。私のような風変りをも包容する奔放な構想を持つ研究所であつてほしいものです。この研究所が五〇年記念を契機に出発の原点に立ち帰り、他の国立研究所にみられない発展をしていくことを心から望んでいる次第であります。どうもありがとうございました。

2

坂田 吉雄氏

私は昭和一八年に京都帝国大学人文科学研究所の助手に採用していただきまして、四五年に停年退官するまでの二七年間置いていただきました。

いまは人文科学ということばはすっかり人の耳に慣

れて、だれも不思議に思ふ人はないと思いますが、私のはいりました頃は人文科学ということばは全く耳新しいことばでありまして、私自身、人文科学つていったいどんな学問だろうかと思つていました。どういうものかわからないで人文科学研究所に入れてもらったというのも変な話ですが、所長の高坂先生が京大の文学部哲学科を卒業された先輩ですから、高坂先生が所長をしておられる研究所だったら私もまんざら縁がないこともないのだろうと思つて入れていただきました。

はいりましてから、高坂先生に人文科学つていったいどんな学問ですか、と聞きましたところ、これはデイルタイのガイステスビッセンシャフトの翻訳だと言われました。直訳すれば精神科学ということになるんだけれど、当時としては、精神というと日本精神とか国民精神ということにもつぱらとられまして、現に東京に国民精神文化研究所というのがあつたわけですから、そういうものと区別するために、精神科学としないで人文科学ということばをつくつたんだと言われました。

デイルタイが学問を、自然現象の因果関係を究明する学問と精神現象の意味を理解する学問というふうに分けまして、後者をガイステスビッセンシャフトと名づけたということは大学の講義でも聞きまし

たので、なるほどそうかと一応合点したわけですが、実際のところ研究所で研究しているのは中国研究でした。中国研究も古いところは東方文化研究所でやっていますから、人文科学研究所でやっているのは現代中国の研究である、ということでした。私も現代中国思想というものを一から勉強することになりました。孫文だとか康有為だとか梁啓超だとかの本を読んだりしていたのです。

ところが戦争に負けると、研究所がつぶされるかもしれないということになりました。というのも、もともこの研究所は、戦争目的達成に寄与するというような名目でたてられたものであったからです。そこで研究所の研究内容も一八〇度転換しました。東から西へ全く文字どおり一八〇度転換しまして、中国研究からアメリカ研究ということになりました。私は、またそこで一からアメリカ研究をやることになったわけがあります。

そのうち東方文化研究所と人文科学研究所と西洋文化研究所とが合体して京都大学人文科学研究所となり、そこに東大部、日本部、西洋部の三部ができますと、私は日本部に配属されることになりました。またここで、私は更めて初めから日本の近代社会というものを一から勉強することになりました。

こうして、六、七年のあいだに三度、研究対象を変えたわけですが、それ以後は二〇年間、日本部で日本の近代思想の研究をやらせていただきました。

研究所が発展するにつれて日本文化、東方文化つまり中国文化ですが、そして西洋文化という枠をだんだんはみ出しまして、世界文化の研究というふうになりました。さらにそれをはみ出しまして、こんどは世界文化というのが人間の精神のこしらえた文化で、それからさらにはみ出して霊長類の精神まで問題にするようになりました。まさにガイステスピツセンシャフトというものの研究ということになったわけです。

世間では、人文科学といえば京大の人文科学研究所でいろんなことをやっている、それらをひつくるめたものだ、と考えている人もさうとう多数います。それはそれでけっこうなんです、けれども、人文科学ということばの成り立ちについて、私が高坂先生からお聞きしたことをこの席をかりてご披露した次第であります。

3

桑原 武夫氏

みなさん楽しく酒を飲んでいらつしやるところなので、あまり理屈は言いたくないんですが、研究所が設

立されたころの話は、講談社現代新書の『学問の世界』で加藤秀俊さんと小松左京さんにしておりますので、くりかえしませう。

個人的なことを言えば、私はそれまで仙台の東北大学におったのですけれども、研究所が新たに発足するにあたって西洋学もやる、その主任をやれということでお招きをうけて、一九四八年に参りました。

私を呼んでくれたのは、先ほどの所長のごあいさつのなかにもありました安部健夫君と旧友の吉川幸次郎君で、このふたりが別々に私を推薦してくれたのです。京都へ戻る下打合せに一度会いにくるようにと、鳥養利三郎総長に言われて、出てきたことがあります。とてもえらい先生ですが、おまえはこうするかあするかと突っこんでおっしゃるので、私はがんばってやるつもりですけれども、ほんまに人文科学研究所はできるんですか、と言いますと、総長が怒りまして「できることがあるものか。もし大蔵省が予算を通さなければ、私はこの事務局長をつれて主計局長室に弁当をもって座りこみをする」と学生みたいなむちゃなことを言われるので、これならやれると思ったものです。

そして研究所へきて、二十年間とても楽しい研究生活ができましたことを感謝して、お祝いの言葉といった

します。ありがとうございました。

4

今西 錦司氏

本日はおめでとうございます。みなさんとともに喜びにひたりたいと思います。

先ほど藪内さんが、人文には変わった者が多いとおっしゃいましたが、私は農学部を振り出しにして理学部、それから人文と移ってきたものでございます。のら犬みたいにさまよっておりました。人文を定年でやめるときには、在職年数が不足して年金がもらえないかもわからんというので、渡辺さんに大変お世話になりました。

雀の涙か蚊の涙か、ちょっとだけ退職手当をもらい、こりやまだまだ働かなあかんと思ひまして、それから岡山大学、岐阜大学と、転々といたしました。私の好きな歌に「流浪の旅よ、いつまでつづく」というのがあります。まああれですね。岐阜大学の学長をやめたとき、これでようやく落ちついて仕事ができるようになったと思つたら、もう日の暮れで太陽が西へ沈みかけている。まだやらんらんことはいっぱいあるんですがね。だれかこのなかに私の仕事を継いでくれる人がありますまいか。はかない望みかもしれませう。

んが。これで終わります。

5

林屋辰三郎氏

今日の五〇周年記念式典にお招きいただいた者として、心からおよろこびすると同時に、昨年三月までこの研究所におりました者としては、その後、皆さんが祝賀行事をこころまで盛り上げられたことに対して、本当にご苦労さまでございましたと、厚くお礼を申し上げなくてはなりません。



五〇年の歴史も、東方面を出発点として一〇年毎に新しい意味を加えており、なかなか五〇年の一貫した歴史として、把握しにくい所がありますが、けっきょく、戦争と平和の長い五〇年を、学問とくに人文科学の側からいかに追求したか、そういう歴史だったと思います。この間に、現代の新しい課題のような地域研究だとか総合研究だとか、そういう大きな学界、学際の研究方法の問題を、もう早い時代に提唱されていたことも注目されましょう。それを桑原先生の主旨ときいておりますが、共同研究という形式できりひらいていかれたという点で、私は、人文科学研究所が新しい学問の方向をさし示した立派な研究所であったとかえりみて誇らしく思うのでございます。

しかし、歴史の栄光を過去にもつものは、むしろ未来に期待されるものであると考えます。これから、二一世紀に向けてみなさんのご活動を心からお願いしたいと存じます。

本当におめでとうございます。同時にみなさん方に対して感謝いたしたいと思います。どうもありがとうございます。

講演



夏期講座（昭和五十四年度）

〈宗教と社会〉

八月一日～三日
於 分館ロビー

1 維新変革と神祇官の再興

羽 賀 祥 二

国家（皇室）祭祀および神祇行政を統轄する官庁として大宝令によつてはじめて規定・確立された神祇官は、律令制の衰退とともにその職掌は減少し、ついに応仁の乱の中でその殿舎が焼失して官庁として消滅した。しかし、その名目的官職は十一世紀中頃王孫である白川家が伯を世襲しつづけ維新まで至った。

江戸時代には室町幕府と結んで台頭した吉田家が白

川伯家をしのいで全国の圧倒的多数の神官を支配するとともに、吉田神社の斎場所を神祇官代として、江戸幕府の下で限定的に許可された皇室祭祀を主宰するようになった。幕末期の公卿・神官・国学者にとつて、吉田・白川両家による官職補佐を通しての神官の私的支配と限定された皇室祭祀のあり方は、神祇官の再興による神社・神官支配の確立と天神地祇の祭祀を基本とした国家（皇室）祭祀の体系的整備へと転換させられなければならなかった。

維新変革の復古的側面を示す神祇官の再興はこの二つの課題を実現すれば、それは律令的制度への復古といえたが、復古を推進した平田学の系統の神官・国学者にはもう一つの、復古神道を仏教にかわつて国教化するという課題があつた。それは政治的にはキリスト教の浸透に対抗する意味をもつものであつて、キリスト経Ⅱ邪宗門に対する神祇道宗門の国教化であつた。さらに、神祇官は皇霊祭祀の一環として荒廃していた天皇陵の修復・管理という職務をも抱えこみ、きわめて多様な政策の実現を果たさなければならなかった。神道事務科、神道事務局、太政官内の神祇官、律令制的神祇官とつづく官制の変遷について、その過程にどのような政治的あるいは思想的な相克があるのか、また西洋の政治制度のどのような影響があるのか、と

いう点に関しては全く究明されていないが、廃藩置県に伴う官制改革で神祇が神祇省へと改正されたことからわかる様に、神祇官制は近代的な権力集中とは対立する要素であった。

神祇道宗門を確立する一環として実行されはじめた神仏分離・廃仏毀釈は、宗門確立政策の後退のなかで、その狂信的性格は、徐々に薄れ、政府の宗教政策（寺院整理）の下で秩序的に行なわれるようになるが、神仏分離の深さと広がりについては、神仏習合を本質とする修験道処分の失敗などの問題を素材として、民間信仰と関連させて考えてみる必要のある問題である。

2 イギリスからみた

幕末日本の宗教

横山 俊夫

ことなる文明がふれあうと、双方の成員に滑稽なところどもがおきる。相手の文化のひとつひとつを称賛的にして模倣をこころみたり、逆にきびしい非難の声

をあげるかとおもうと、同情をもらしてみたり、笑いのタネにするほどならとて、よそよそしくしてみたり……とまことにいそがしい。

一九世紀後半のイギリスと日本の出会いもその例外ではなかった。ただ、いさか奇ッ怪なのは、イギリス人も日本人も、その大部分が、いきなり相手方の文明の原理原則なるものを糾問するのに急であったことである。そして両者とも、その原理とは宗教・道徳のことなりと信じて疑わなかったのである。とりわけ合いはじめの頃は、双方の知識人の関心は相手方の性道徳に集中しがちであった。「ニッポン男のライセンシャスネス」、「エゲレス女の淫乱」と、彼らは真剣に診断しあったものだ。双方とも、自分たちの伝統的な価値と考えたしなじみのものなから、相手方の文化にも直接コレスポンドしうるものを抽象し、それをいわば外むけのタテマエの価値体系として、みずからその権化となつて論じはじめたのである。厄介なのは、このタテマエが外むけにつくられているということの自覚がなかなか生まれないと同時に、それ自体が往々にして旧来の文化をかえてゆくことである。

さて話は、こういう素性のお合いからスタートする悲喜劇へと発展するはずであったが、今回は日本側に生じたことがら、たとえば諸藩の「淫祠」とりこわし

や維新後の廃仏棄釈といった、あきらかに西洋との接触と無関係ではないタテマエ調整の現象には、ごくわずかにふれるにとどめ、いきおいイギリス側のうごきを見ることに集中した。

このタテマエとみずからのアイデンティティが混然一体となった人物の一例に、マヌートの聖パトリック・カレッジのC・W・ラッセルを登場させた。このタテマエの欺瞞にうすうす気づいていたスコットランド・フリー・チャーチ派の『北英評論』などは、一八五〇年代末頃には、むしろ日本にいるイギリス商人に「高いモラル・スタンダード」を求めはじめる。ただ、この提言の背景にあったのは、やはり自己の原理にあくまで同化しようとし、日本人とイギリス人との間に共通性を見出したいくないとする、いわば白高への情熱であった。

一八六三年、ロンドンでオールコックの『大君の都』が出版されるや、イギリスのさまざまな知識人が日本における宗教施設と娯楽施設の雑居や日本人の宗教的無関心などをとりあげた。H・リーヴは、日本を物質主義の極みにある国として「モラル・パワー」によってうち破らるべしと叫び、J・H・トレメンヒールは、日本人がキリスト教なくしてはたして幸福になれるのかと、心をいためたのである。

ただ、一八六四年ころから、ヨーロッパ大陸での不穏と、日本の内乱の深刻化とがないうまに意識されはじめると、この外むけのタテマエをひどく色あせたものとみる少数派が出てくる。J・F・ステイヴンは、日本では「低い」道徳律と現実の間に落差はなく、人々は幸せであると論じ、この種の落差の大きいキリスト教世界の鯨張りのほどを描いた。当時「キリスト教」と「交易」を一体として広めることこそ「文明」の使命であると呼ばわっていたオールコック先生を、大いにひやかしたのである。同じ落差に悩んだL・オリファントのほうは、ヨーロッパをすて、教祖T・L・ハリスのアメリカのコロニーに身を投じて「知行合一」をめざそうとする。

ステイヴンの醒めた雰囲気には、維新のすぐあとに登場した、A・B・ミットフォードによる日本の道徳の研究に通じるものがある。後者はイギリス国教会のサーモンと柴田鳩翁の心学道話をまったく同質のものとして比較した。ただしこのような自由な比較が生まれるまでに、イギリス側において必要であったのは、皮肉なことに、キリスト教世界の外むけのタテマエの文化が時々の絶叫をまじえながら、いわゆる合理的道徳律に近いものにまで抽象化され、非ヨーロッパ化されていることであった。ちなみに、当時、国教会

の福音主義系の伝道団体CMSの内部においても、日本仏教とローマン・カトリックを同質の偶像崇拜と断ずるほど、教理の単純化が進められていたのである。

3 琉球の宗教儀礼と

そのシンボリズム

松井 健

琉球諸島の民俗文化が、その基底に、象徴二元論というかたちで定式化できるような世界観をもっているという指摘は、馬淵東一らによってなされ、すでに琉球に関する社会人類学的研究のなかでは自明のことと認められるようになっていく。しかし、こうしたかたちで把握される民俗社会のシンボリズムの体系が、具体的に島人の生活のなかでどのように位置づけられるかについては、十分に論じられていない。

宮古群島の来間島^{ミマ}における二つの代表的な宗教儀礼、コモン・ニガーとヤーマス・ウガンは、これらの問題を考えるのに好適な素材となる。コモン・ニガーは、「こもり願い」であって、女性神官が島の東と西

のウガン（御願）所にわかれて二晩こもったあと、島の中央の井戸のウタキ（御嶽）で合流し、そこでウガンをおこなうというものである。

この島の豊饒を祈る儀礼の下には、時間と空間についての島民のシンボリックな分類体系がかくされている。この彼ら独自の分類体系は、極端に抽象化するならば、象徴二元論と呼ばれるものとなる。また、この儀礼をエリアーデ流に定式化すれば、男神と女神とが交わってこの島を生んだという神話に語られている「祖型」を、儀礼という場において「反復」するものだ、ともいえる。井戸のウタキでの儀式で用いられる神酒（ンツ）の容器は、プスサギといわれ、その注ぎ口はマラと呼ばれる。プスサギは性器を露出していること（プスは女性性器）を、マラは男性性器を意味するから、にがり酒であるンツは、男神の精液サニに比定されることになる。すなわち、この儀礼は、性的な辞項を用いて、島の豊饒を象徴しているとも解釈できるわけである。

一方、ヤーマス・ウガンは、来間の島を立てた神話上の三兄弟に発するとされる三つの祭祀集団（仮想的な父系出自集団）が、互いにその団結を誇示し、競いあうことをその内容としている。この儀礼は、もっぱら男性によってすすめられ、父系出自や競合的發展と

いった男性的な社会編成の原理に力点を置いたものである。こうした、相補的な宗教儀礼とそのシンボリズムのなかに、過疎に悩む小離島の人々がはぐくんできた豊かな精神世界をかいま見ることができるのである。

ところが、儀礼的世界と日常世界との関係という前記の問題は、まだ十分明らかにされないままであるし、ひとつの儀礼の説明のために、もう一つ別の辞項の体系(たとえば性関係や社会編成)を用いても、これではシンボリズムの「解釈」とはなりえないのではないかという疑問もおこる。宗教儀礼とそのシンボリズムという、社会人類学のなかではもともと古くから活発に調査・研究されてきたと思われる領域についてすら、まだ十分に解明されていない課題が山積している。

4 鬼道と神道と真道

福 永 光 司

これまで中国の政治思想(律令制)は古代からの日本に大きな影響を与えたが、中国の宗教思想(道教)

はそれほど見るべき影響を与えなかったというのが、大方の学者の意見であった。しかし、この意見に対して私は以前から強い疑問を抱いている。伊勢神宮を初めとする日本の神社の多くが鏡を御神体に行っているのは、中国の宗教思想(道教)と果して無関係なのであるうか。日本国における天皇の称号やその權威を象徵するとされる鏡や剣などの神器は、その思想の源流を道教の宗教哲学にもつのではないか。ないし現代においてさえ日本人の間に広汎な範圍の信奉者をもつお守りやお札の信仰もまた中国古代の呪術宗教的な信仰(道教)にその源流をもつのではないか等々が、私の疑問の主要な根拠である。

この疑問を解明するためには先ず、これまでの学者が殆んど行なっていない中国とくに日本と密接な交渉をもつ中国古代の宗教思想の展開の思想的な研究が必須の前提となる。「鬼道と神道と真道」と題する本日の私の話は、そのような思想的な研究の一つの整理の仕方の青写真Ⅱ思想展開の系譜づけの一つの試みにほかならない。

世界各地の民族の原初的な宗教がシャーマニズムを主とするものであったように、中国においても宗教思想の基底をなすものは、鬼道とよばれるシャーマニズム的な呪術信仰であった。中国の古代文献において

「鬼道」の語は大別して三種の用法をもつ。(1)は『史記』などに見える「八通の鬼道」で鬼神の往来する通路。(2)は『国語』などに見える「人道」に対する「鬼道」、すなわち鬼神の世界における道理、理法。(3)は『魏志』張魯伝などに見える鬼神を駆使する道術としての「鬼道」。その秦漢時代における具体的な事例は古く『史記』封禅書などに詳しい。

しかし西暦二世紀、後漢の中頃から、シャーマニズムとしての「鬼道」は、その上部構造に『易』と『老子』の形而上学を上乘せするようになり、自らの教を「神道」として強調するようになる(例えば「ば于吉の神書」として正史に記録する『太平清領書』Ⅱ『太平経』など)。もともと「神道」の語は既に早く『易』の哲学の中で用いられていたが、ここに至って宗教的超越的な世界の真理一般を意味するようになり、中国仏教もまたやがて「神道」の語を「仏道」のシノニムとして用いるようになった。

『太平清領書』の「神道」の思想は、それに約半世紀おくれる張角の太平道、さらには三世紀における張魯らの天師道に引き継がれたが、天師道の宗教教団は彼らの教団の神(上帝)に選ばれた者としての優越性と使命感とを特に強調して、彼らの「神道」をさらに「真道」と称し、当時の儒教的な日常倫理の教を俗道

として却けた。「真」と「俗」との区別は中国思想史において『莊子』に始まるが、ここに至って『易』『老子』の哲学と併せて『莊子』の哲学がまた彼らの「神書」の中に導入されるようになり、ついで中国仏教もまた神道としての仏道を特に「真道」とよぶようになる(例えば慧遠や僧肇の仏教学)。

日本の古代と密接な関連をもつ中国古代の宗教思想は、上述のように「鬼道」↓「神道」↓「真道」の展開として跡づけることができるであろうが、「神道」の中にも「鬼道」が温存され、「真道」の中にも「鬼道」、「神道」が包含されるという重層的な構造にその特徴をもつ。弥生期以後の日本の宗教思想は、このような中国における宗教思想の展開とそれぞれの時期、地域、段階において密接に対応していると見るべきであろう。

5 インド・チベット仏教学序説

御牧 克己

チベット学を東洋史又はインド学の補助手段ではない独立した学問と考えるべきだという立場は歴史や文

学については成り立ち得るが、教義的な文献についてはやはりインド学とチベット学はかなり密接に関連していると言わねばならない。ここでは、インド学をやる上でのチベット学の重要性、チベット学をやる上でのインド学の重要性を強調すべく、その一例としてチベット宗義文献に於けるインド中観派の分類を取上げる。

一般にインド中観思想史は次のように概説されるのが普通である。竜樹・提婆によって創始された中観派は中期になって、清弁の自立論証派と、仏護・月称の帰謬論証派に分れる。簡単に云えば、前者は中観の空の真理を論理的な推論式に構成し得ると主張し、後者はそれを否定する。自立論証派はさらに世俗的なレベルで外界の存在を主張する経量部の立場をとる経量中観派と、世俗的なレベルに於ても外界の存在を否定し唯識の立場をとる瑜伽中観派に分かれ、前者には清弁・智蔵が、後者には寂護・蓮華戒が属する。

ここで注意しなければならないのは、自立論証派・帰謬論証派・経量中観派・瑜伽中観派というこれら中観派分類の用語は全てチベット人によって作られたものであってインド原典中には見出されないことである。しかしそれがこれらの用語の妥当性を失わしめることでは決してなく、むしろインド中観思想史を概観

する上で極めて有効な分類である。問題はこれらの用語の概念内容がチベット人の間で画一的なものではなく再吟味を要することである。例えば智蔵はゲルク派の文献では経量中観派とされるが、サキャ派を中心とする文献の中では瑜伽中観派とされており、14世紀のカダム派の文献中ではこれら二派とは別に立てられた世間随行中観派に配されている。また、経量中観・瑜伽中観を自立論証派の細分とするものも後代のゲルク派の文献であって、14世紀のカダム派の文献を見れば、自立・帰謬論証派の二派の分類と、経量中観・瑜伽中観・世間随行中観の三派の分類とは次元の異なるものであることが解る。

以上簡単に述べただけでもこの中観派分類がかなり複雑なことが解るであろう。現時点でこの問題について為すべきことは、これらの諸概念がチベット人によるものである以上、先づ、近年参照可能になった歴大なチベット蔵外文献の中で再吟味して夫々の概念内容を明確にすることである。しかる後に、それを試金石として、典拠となっているインド原典と照合することによってより正確な中観思想史を確立することである。

6 イエスをめぐる神話的

標識と性について

谷 泰

D・H・ローレンスの小説「死んだ男」は、イエスの死後の再生譚についての一つのパロディとも云える物語りである。そこでイエスは、地上で息を蘇きかえし、インスの祠を守る女と性的に交わり、生の汪洋の中で、真の再生を感じるようになっていく。そこには母性ないしは女性の復権があり、信者の子孫を殖やすための、最大の譲歩として婚姻を認めるといふ、性を生物レベルにまで墮落させたキリスト教の立場への痛烈なる批判がある。ユングも、キリスト教での母性ないし女性性の軽視に対して、その復権の重要性を強調している。

ところでこのようなキリスト教の母性の軽視を生みだした聖書枠の中の父性的原理の復権性、またイエスの位置づけは、どのようなところから生じているのだろうか。一般的にはこれまで、この父性優位は、イスラエルの民の父権制的側面から解釈されてきた。それに対して、イエスの神話的諸標識をみると、そこ

には、地中海地域の放牧羊管理の諸パターンが反映しており、その文脈からも解釈されると思う。イエスは、地上の子として、支配される羊として表象されている。イエスについての「屠られた仔羊」という表象、それは過越しの犠牲になった、傷なき全きオスの当才仔の延長である。ところでそれは、羊群管理で毎年春先きに屠殺されるオスの当才仔に対応する。他方神の側のもので、支配する側、「よき羊飼ひ」としてのみ描かれるのなら、かれは幼くして死すべき運命にある。ところがかれは、神の声をきくと同時に人のリーダーの地位をとる。じつはそれに対応するものとして去勢されたオスの誘導羊というものがある。聖書には、イエスについての誘導羊のメタファーはないが、その誘導羊に比せられる「宦官」への比喩がある。羊牧畜のメタフォリカルな使用は、イエスの表象において明白である。

ところで、これら羊群管理パターンをみても明らかのように、そこには、牧夫（男）のオス羊への特異的介入、そして去勢オス羊を通じての群行動管理という、雌雄両性についての不均等な介入がみられる。羊群管理での性的不均衡、まさにそれをモデルに、イエスのメタフォリカルな表象を引き出したところに、キ

リスト教の性的不均衡、父性の優位の源があるのではないか。死・復活というヘレニズム的農耕祭儀の形式をとりつつも、再生において、女性は一切介入しない。このような点に、牧的モデルに照したエビファニー上の歪みを見出したい。ヨーロッパ的精神風土での性コンプレックスの源を、こういうキリスト教の聖書枠組みに、さらにイエスの神話的表象形成の背後にある羊群管理モデルのうちに求めたい。

創立五十周年記念講演

へ一九二九年（研究所創立の年を記念して）

一月九日

於 京大会館

① ジョージ・オーウェルと

三〇年代のイギリス社会

見 市 雅 俊

大不況ではじまり、第二次大戦の勃発でおわるヨーロッパの三〇年代は、現代史上の最も特異な時代であり、そして様々な神話につつまこまれ、その姿が容易

にとらえがたい時代である。オーウェルを通してその真相に少しでも近づこうとするのが私の目的である。

さて今日ではオーウェルは三〇年代においてファシズムとスターリン主義という二つの「全体主義」に抗した作家として知られている。しかし、ここで強調したいのはオーウェルにとってこの二つの全体主義は実は、イギリスをも含めた三〇年代の西洋文明全体の病理的傾向を暴力的に極限化したものだったということである。では、その病理的傾向とは一体どのようなものであったのだろうか。

それをみるには三〇年代についての「貧困の神話」の再検討が必要になる。イギリスについていえばたしかに北部の伝統産業は極度の不振に喘いでいたが、ロンドンをはじめ南部は自動車、電機等の新産業の急成長によってかつてない繁栄の時期をむかえていた。ここでは、まさに今日の高度大衆消費時代の幕が切っておとされたのだった。かつての充足した社会生活は次第に現代的な大衆社会状況に取って代られていった。そこにオーウェルは、かつての自立的な個人が巨大化し、機械化された国家社会の目にみえぬ網の目のなかにかすめとられつつあるさまをみたのだった。そのイメーজがのちに『一九八四年』のアンチ・ユートピアにまで昇華するのである。

ところで三〇年代のオーウェルの作品では『空気を吸いに』がまさにそうしたテーマを取り上げている。平凡な中年男のふとした蒸発事件を扱ったこの作品は、迫りくるヒトラーの戦争の脅威という背景のなかでの大衆社会状況の漠然とした不安をいささかコミカルなタッチで描いている。

ヒトラーはすでに過去のものとなった。しかし私たちの状況は半世紀たった今もさしてかわってはいないようにおもえる。そのなかで当り前の感性と常識性をもった人間は社会とどうかかわるべきなのか。このオーウェルの問いかけは私たちにとって今日なお大きな意味をもっているのではなからうか。

② 伊藤整と小林多喜二

飛鳥井 雅 道

伊藤整の初期の文学的立場は、『若い詩人の肖像』という自伝的長篇小説のなかに、フィクションを多く加えつつも、かなり正直に描きだされている。その場合、注意すべきは、マルクス主義との対抗の意識であろう。この時期の作品のなかには、一九二〇年代後

半の作者の小樽での青春が、一貫して、二八年以後左翼Ⅱ共産主義運動のリーダーとなつてゆく小林多喜二を意識することで、論理づけられている。短文ゆえに証明は略するが、伊藤整の性Ⅱセックス、愛、恋にたいする態度にまで、政治と社会が奇妙に影をおとしている。

わたしたちは今、小林多喜二の作品を素直に読むとき、そのつまらぬさからなげ伊藤整がそれほどまでに多喜二を意識しつづけねばならなかったか、疑問に思つて当然なのだが、しかし、伊藤整にとつて、多喜二の作品を文学として軽んずることはできても、生き方としての多喜二、正義ないしは時代の精神としての多喜二の姿は、遂に否定しきることができなかったことを考えるべきであらう。

それは平野謙がいったように、「マルクス主義へのコンプレックス」といったものではない。平野謙は自分に伊藤整をひきつけすぎて考えている。伊藤整自身は、もっとドライだった。マルクス主義の虚偽、すくなくとも昭和のそれを、彼は初期短篇以来、摘発しつづけている。にもかかわらず、昭和初期の知識人たる伊藤整は、意識的に自分を多喜二に代表される共産主義者との対立のなかで形成しようとしたのだった。

作家、文明批評家としての伊藤整は、この開所講演

の内容を若干展開しようとした拙稿「伊藤整と小林多喜二」上・下『文学』一九七九年二月、八〇年四月）に書いたように、多喜二よりはるかに深く鋭い。現在のわたしたちは多喜二からではなく、整から問題の所在を受けとりつつある。にもかかわらず、伊藤整が多喜二をめぐるしか考えられなかったところに、わたしは一九二九年という彼らのデビューした時代の問題を見つめざるをえない。

③ 魯迅と郁達夫

竹内 実

谷崎潤一郎は一九一八年（大正七年）に中国各地を旅行したが、中国の文学者と交遊することができなかった。二六年に上海を訪ねたさいは、田漢、郭沫若、歐陽予倩らと歓談痛飲した。文壇らしきものが、成立していたのである。

病氣療養のため故郷にかえっていた郁達夫（ユイ・ダフ）は、ときおり上海にできてはいたが、谷崎とはあわずじまいだった。郁が佐藤春夫に傾倒していたことは知られているとおりであるが、谷崎にも関心

があった。かれがのちに記し、そして公刊した「日記九種」の冒頭に、「痴人の愛」を読んだ記述がある。

その日記には、美しい、杭州生まれの王映霞との恋愛の経緯がみえ、そのことによって天下に喧伝されるわけであるが、じつはその恋愛は、「痴人の愛」を现实生活に移植しようとしたものであった、と読める。日記の記述は、友人との回想とのあいだに出入がある。

一九二八年、パリへの途中、上海に滞在した金子光晴は、郁達夫と親密につれだっている魯迅（ルー・シュイン）をよく目撃した。妻を同伴している金子を郁はからかい、さらにその郁を魯迅はからかったが、魯迅もからかわれてよかったはずである。魯迅も郁と同じく、妻帯しているながら、べつの女性「許広平」の生活をはじめていたのであったから。

魯迅から、「結婚した」と告げられたのは、内山完造だけではなかったろうか。郁にたいしても、きりだした形跡はない。アモイの大学で同僚だった林語堂は、景雲里の魯迅宅を訪問した帰途、ふたりの関係を郁に質問したが、郁ははぐらかした。のちに許広平が懷妊したと伝えきいて、林語堂は郁にうらみごとをいった。

その逸話を記したあと、郁達夫は魯迅が死んでからの回想のなかで、魯迅がタバコを吸うときの癖につい

て語っている。ハコのままふところにいれ、一本ずつひきだして吸ったので、どんなタバコかわからなかった、というのである。

郁達夫は、王映霞との婚約披露宴を杭州で盛大にひらき、弁護士をたてて、妻と離婚した。さらに、結婚披露ととれる招待状を友人に宛てて発送したが、しか

しその場所は東京上野の精養軒であり、しかも、届いたのは当日から一月もおくれてであった。

郁達夫の恋愛は離別をもって終わった。かれはついに谷崎の作品のなかの男のように徹底できなかった。かれが杭州に移居しており、魯迅はすでにその悲劇を予見したかのごとき詩を、贈っている。

おくりもの

今西名譽教授は文化勲賞を、桑原名譽教授は文化功勞者賞を授与された。

人のうごき

○曾布川 寛助手（東方面）は辞任の上、京都市立芸術大学講師に転出（六月三日付）。

○前川和也助手（西洋部）は講師に昇任（七月一六日付）。

○飯沼二郎教授（日本部）は、七月二四日成田発、上海、蘇州、南京、広州等で農業調査を終え、八月七日帰国。

○田中峰雄助手（西洋部）は、八月三日成田発、フランス政府の招請により、フランス社会科学高等研究院でフランス中世大学の社会史的研究の為、一年間滞在

し、五五年八月二九日帰国予定。

○横山俊夫助手（日本部）は、八月五日伊丹発、オックスフォード大学で一九世紀の日英史研究を終え、一〇月二三日帰国。

○大前 真助手（日本部）は、九月八日成田発、ウオリック大学社会史研究センターで日英労働史の比較研究の為、一年間滞任し、五五年九月七日帰国予定。

○河野健二教授（西洋部）は、一〇月一六日成田発、パリ第三大学社会科学高等研究院で一九三〇年代のフランスに関する研究調査、ベルグラード大学で国際会議に出席し、一〇月二九日帰国。

○田中 淡助手（東方面）は、一〇月一四日成田発、上海博物館、南京工学院、七里岩洞窟等で、歴史的都市及び建築に関する研究調査を終え、同月二七日帰国。

○川勝義雄教授（東方面）は、一一月二三日成田発、フランス高等研究院で、中国中世社会史に関する研究指導及び研究調査の為、約一年間滞任し、五五年九月一八日帰国。

○福永光司教授、勝村哲也助教授（東方面）は、一一月二二日成田発、中国仏教協会、西安大学、玉皇頂等で、中国宗教思想史研究調査を終え、一二月六日帰国。

○濱田正美助手（東方面）は、一一月一八日伊丹発、馬王堆西漢墓、岳陽樓、武漢大学等で、中央アジアとの文化交渉史に関する調査を終え、一二月七日帰国。

○梅原郁助教授（東方面）は、一一月二二日成田発、雲南省博物館、竜門石窟、河南省博物館等で、中国の文化・教育機関視察及び交流を終え、同月二八日帰国。

本のうわさ

河野健二編

フランス・ブルジョア社会の成立

——第二帝政期の研究——

(A5版 三八九頁、年表、参考文献索引 岩波書店)



本書を読みながら感じたことは、歴史とはこんなにもおもしろいものか、ということであった。ちょうど巻頭の、ルイ・ナポレオンの政治的上昇のあたりを読み終わったとき、中国社会科学学院近代史研究所長、劉大年(リュウ・ターニエン)氏がこれ、「大衆と指導者の関係を論ず」という題で講演された。講演といっても、準備の原稿を読まれたのであるが、ルイ・ナポレオンという独特の存在をあたまたの片隅にうかべながら拝聴していると、コックが名人芸でこしらえた料理に、自分の好みの調味料をふりかけて味わっているような気分で、なかなかよかった。

劉氏の説は要するに、歴史と個人の関係

を説いたブレハーンノフの説の枠組みをひきついで、指導者の運命を決定するのは大衆だという、いかにも当然な筋書きであった。しかし、そのなかに、「指導者は大衆を指揮するが、大衆から制約されるものであって、支持はまた制約でもある」(配布のプリント九ページ)という一句があったので、「そうすると、民衆というのは、酷ないいかたをすれば、狡猾なモノですネ」と質問したところ、かすかな微笑がかえってきた。

わたしはいくらか劉氏の説(というより、こういった普遍的命題)に不満であったが、それは、すなわち、ルイ・ナポレオンのせいである。

本書の河野先生の論文によって、はじめて知ったにすぎないとはいえ、『政治的夢想』とか、『ナポレオンの観念』とか、『貧窮の絶滅』とかの著作をもち、その著作でのべた自己の観念を外界における現実として実現していったところに、なみなみならぬ、かれの個人的資質がみとめられた。もちろん、その成功は、フランスの民衆の支持がなくては実現しなかったにちがいない。しかしかれが、自分の出番を予見し、それに挑んでいったあたり、これをただ、民衆の支持一般に解消したのでは、歴史は無味乾燥なものになろう。

わたしは最近、一部の歴史学者が、ブルジョア階級とかブルジョア革命とかについてはもっぱらその限界を論じ、プロレタリア階級とかプロレタリア革命については、その優越性(というより、プロレタリアの存在そのもの)を、虫メガネを使ってでも捜してくる態度がやりきれなくなり、歴史不信におちいついていたが、本書によって救済されたおもしろい。

収録の諸論文が相互にひびきあい、全体として流れたす音が、いい。(竹内実)

林屋辰三郎編『文明開化の研究』

(A5版 六六〇頁、年表索引付、岩波書店)

最近中国へ行ってきた人の話を聞くと、もうムチャクチャらしい。私も一年前、中国旅行をしたのだが、この一年でさらに中国は変わったことである。風俗の面からみても、公園では男女が抱き合い、泥棒、搔払いが増え、麻雀が復活し、復活は女性が春を売ることにもまで及んでいるらしい。話半分に聞き、又このようなことは表面化しなかったただけとしても、中国の変貌には驚かされる。

こうなると、文化大革命とは、何だったのか、果ては人民解放がどこまで人民の中に浸透したのか、考えさせられる。冒頭、「この一年で中国は変わった」と述べたが、「中国は変わらない」と言った方が正確かも知れない。文革の嵐がいくら吹き荒れても、中国人の頭の中の変革はなかなかできない。否、変革をなかなかしない。それが中国人のしたたかさなのであろうか。古来、名と実、経と権、原則と例外、本音と

建前を鋭く緊張関係に置き、それを使い分けてきた中国人の伝統なのだろうか。

中国のそういう面に比べ、日本の文明開化は、ある面では対照的である。政府が「煉瓦地建設にしやにむに突進し」、「不良住居としての現実」があっても、東京が「庶民生活では、それほどかわりばえがしたわけでない」とはいえ、又文明開化そのものが「上からの文明開化」、「見せかけの文明開化」であり、「外国人がもつ誤解の上に成り立った奇怪さ」をもちつつも、「それでも文明開化は東京をかせ」、さらには日本を変えたのである。文明開化に批判的な伝統主義者たちが、妥協・攘夷・墨守・折衷などの型をとりつつ対応しても、やがては、日本人全体として頭の中の変革が徐々になされていったということに、日本人の伝統があるのだろうか。

専門的に門外漢である私には、学術論文集であるこの『文明開化の研究』の諸論文

を学術的に評価する力はいまもとよりない。第Ⅱ部「場」に於いて、文明開化がイギリス、フランス、東京、京都など各地各国に与えた異なった影響を浮き彫りにした点、はなはだ興味深く、面白く読ませてもらった。ただそれに比し、第三部において、六篇を何故、とくに「形」の部に入れなければならないのか私には疑問が残る。いつてみれば、一七篇全てが、文明開化の「様式」を追求したものだから。

(富谷 至)



書いたもの一覧

一九七九年六月～十二月
(五十音順、●印は単行本)



飯沼二郎

三里塚と八郎潟

連統シンポジウム・金芝河

外国人教員任用特別措置法案に関連して

京都大学新聞 六月一日

毎日新聞 六月二日

共同通信社系各紙 六月上旬

センター通信 四〇号 六月

一人の朝鮮人との出会い

日本の風土からみた食糧生産

●歴史のなかの風土

言葉とともに

農業と経済 臨時増刊 六月

日本評論社 六月

読売新聞 七月一七日

中国の近代化——官僚路線復活の懸念

信濃毎日新聞 七月二六日

真の民族教育とは(在日朝鮮人教育研究全国集会資料その一)

座談会・政治亡命と市民運動(小野誠之・大沢真一郎・鶴見俊輔と)

50万円自給運動の展開・コメント

農民の自立とキリスト教

日本の在来農具

自然と文化 七九秋季号 九月

わが国の資本主義と風土 争点 二一号 一〇月

日本経済と日本農業

農書を読む会

対談『寄留の民の叫び』をめぐって(和田洋一と)

本のはろば 十一月号

『農業往来』における文明開化(『文明開化の研究』)

The development of Japanese plough in the first half of the 20th century. Zinbum 一五号 十一月

池田秀三

『潜夫論』版本小考——特に元大徳本について——

中国思想史研究 三三号 十一月

今井清

●礼記下『全釈漢文大系』一四卷(共訳) 集英社 七月

上田篤

日本人の生活と都市化(『発達とその環境』の内)

●ユーザーの都市 学陽書房 六月

●E・モース『日本のすまい——内と外』(共訳)

日本人のすまい観をめぐって 鹿島出版会 六月

読売新聞 六月

築地——淀川（近畿その住環境と文化）

朝日新聞 六月

すまいの歴史「草」

シミズブレティン 四五 八月

町づくり——宝塚（近畿その住環境と文化）

朝日新聞 八月

千里——ニューシティ（近畿その住環境と文化）

朝日新聞 八月

〈イエ〉と〈ミチ〉の親和をめざして

自動車とその世界 九月

すまいと風土

ESP 一〇月号

●くるまは弱者のもの

中公新書 一〇月

●都市の文化行政（共編）

学陽書房 一一月

・上山 春 平

Fujiwara Fuhito—A Buried Colossus

Japan Quarterly, Vol. 26 No. 3, 1979

●日本の国家像

日本放送出版協会 一〇月

・梅原 郁

開封——新しい時代の百万都市

月刊百科 二〇三 八月

宋代の都市生活

NHKラジオ学校放送 二月期 九月

●沈括・夢溪筆談（訳注）Ⅱ

平凡社 九月

●宋代の中国、元代の中国はか

学研版図説世界の歴史Ⅱ 一〇月

・太田 武 男

●現代の遺言問題（編）

有斐閣 一〇月

家族法判例の概観——最高裁判例の歩み——

法学セミナー増刊 所版 九月

・小野 和 子

書評『宋慶齡選集』

週刊読書人 九月三日号

書評・奥崎裕司『中国郷紳地主の研究』

史学雑誌 八八編九号 九月

・勝村 哲 也

衆と宗

月刊百科 二〇一 六月

大市と小市

月刊百科 二〇二 七月

蘇屠と浮屠

月刊百科 二〇三 八月

・河野 健 二

Matrices du républicanisme Japonais. Zinbun 15号 二月

日記から

朝日新聞 七月二六日〜二九日

現代のことば

京都新聞 七月四日、八月一日、九月

新しい地域の発見

近畿圏研究 六号 八月

地域と文化

地域開発 一〇月号

ファシズムをどう論ずるか

朝日ジャーナル 一一月九日号

50年迎えた京大人文科研

毎日新聞 一一月九日

世界史と明治維新

月刊歴史教育 一一月号

●資料 フランス初期社会主義（編）

平凡社 一一月二〇日

・桑山 正 進

●ヒンドウ・リクシュ南北の古代美術（週刊朝日百科世界の

美術85）

朝日新聞社 一一月

・阪上 孝

書評・E・バリバール『史的唯物論研究』

日本読書新聞 六月四日

翻訳・J・J・ルソー「政治経済論」『ルソー全集』五巻

白水社 八月

書評・J・カサー『一八四八年——二月革命の精神史』

週刊読書人 一〇月八日

労働のミリュール（河野健二編）『資料フランス初期社会主義』

平凡社 十一月

フランス社会主義の諸潮流

同右

二月革命

級

翻訳・アドルフ・ブランキ「リール市とノール県の労働者階級」

同右

翻訳「労働者手帖法案」

同右

翻訳・コロシ「リヨン蜂起とその原因について」

同右

翻訳・『エコード・ラ・ファブリク刊行趣意書』

同右

翻訳・エフラン「あらゆる職能組織の労働者による協同組織について」

同右

翻訳・『フラテルニテ』

同右

翻訳・シャルル・ノワレ「勤労者への第二の手紙」

同右

翻訳・『ユニオン』

同右

翻訳・A・トクヴィル「新しい革命の社会主義的性格」

同右

翻訳・P・J・ブルードン「情況」

同右

翻訳・ブルードン「信用と流通の組織化と社会問題の解決」

同右

翻訳・ブルードン「政治問題と経済問題の同一性」

同右

翻訳・「労働者のための政府委員会一般報告」 同右

翻訳・ダニエル・ステルン「六月二日、六月三日」 同右

翻訳・「リユクサンブル委員会代表と労働者コルボラシオン委員会の報告」 同右

佐々木 克

五代友厚（『図説人物海の日本史』9） 毎日新聞 七月

版籍奉還の思想（『明治国家の権力と思想』）

吉川弘文館 一〇月

文明開化の政治指導（『文明開化の研究』） 岩波書店 十一月

竹内 実

声なき処に驚しき雷を聴く

信濃毎日新聞 六月二〇日

旧友再会

総合的・大局的 お茶の詩 京都新聞 七月一六日

中国・建国三〇年の試練（鼎談） 京都新聞 八月二一日

雑文の復権について 週刊朝日 九月二九日

谷崎潤一郎の中国旅行 文芸 一〇月二二日

中国文芸茶話（二五〇三〇） 京都新聞 一〇月二二日

多田 道太郎

●日本語の作法 京都新聞 一〇月二二日

●定本管理社会の影 潮出版社 七月

解説（九鬼周造著『いきの構造』） 日本ブリタニカ 九月

うしなわれた旅（『日本名所図絵』月報） 岩波書店 九月

まんがの主人公 角川書店 九月、十一月
共同通信 九月、十一月

●野球戯評 講談社 一〇月

●ルドフスキー著『みっともない人体』（共訳） 鹿島出版会 一一月

・田中 淡

●J・ニーダム『中国の科学と文明』一〇卷（共訳）

思索社 七月

ニーダム博士の建築史学（『中国の科学と文明』月報一〇）七月
建築史—最近の出版動向 アクセス 三五号 七月

・谷 泰

羊の放牧管理に違い——アフガンとルーマニアの比較

朝日新聞 六月三〇日

エヴァンス・プリチャード監『世界の民族3・ヨーロッパ』

（訳監修）

平凡社 八月

書評、熊倉功夫『茶の湯』 芸能史研究 六三号 一〇月

コメント、野田正彰・白松美加「妄想共同体について」

季刊人類学 一〇卷四号 一一月

・磯波 護

唐の三省六部（唐代史研究会編『隋唐帝国と東アジア世界』）

汲古書院 八月

分裂時代の中国・隋唐帝国（『図説 世界の歴史 2 アジア

国家の展開』） 学習研究社 一〇月

・羽賀 祥二

開国前後における朝幕関係 日本史研究 二〇七号

・狭間 直樹

中国歴史学界の現状 毎日新聞 六月七日

近代における中国と日本（座談会） 歴史公論 一〇月

最近の中国における五四運動研究について

中国研究月報 一〇月

・林 巳奈夫

中国古代の酒器 考古学雑誌 六五卷二号 九月

・樋口 謹一

ルソーにおける秩序の問題 平和研究 六月

The Political Key-Concepts of J.-J. Rousseau:

Zinbva 一五号 一一月

・深沢 一幸

鄧先生のこと 京都日中学術交流懇談会会報 五号 一〇月

・福永 光司

劉向と神仙——前漢末期の神仙道教的世界

中哲文学会報 四号 六月

三浦梅園と道教

私の卒業論文

梅園学会報 四号 六月

「法華経」、「維摩経」、「勝鬘経」、一字索引の刊行に寄せて

中外日報 一一月六日、八日

日本禅と中国禅（鼎談）（講談社『日本の禅語録』月報

一八号）

一一月

・古屋 哲夫

第八八、八九、九〇議会展説(『帝国会誌』四八、四九卷)

東洋文化社 七、八月

・松井 健

イヴァナの日々——バタン島調査ノートから——(黒潮文化の会編『新・海上の道』) 角川書店 七月

幻想動物の胎生学

民博通信 六号 十一月

・前川 和也

The ass and the onager in Sumer in the late third millennium B. C.

Acta Sumerologica, No. 1 (1979, Dept. of Linguistics, The University of Hiroshima).

・見市 雅俊

万国博の経済史(『講座 西洋経済史』産業革命の時代)

同文館 一〇月

書評・富岡次郎著『ゼネストの研究』

西洋史学 一二号 十一月

翻訳・「サン＝シモン主義解義」ペレル「信用改革」

(河野健二編『資料フランス初期社会主義』) 一二月

・御牧 克己

Chado (中道), *Hobogirin* 『茶宝義林』 V. Fascicule, 1979.

・柳田 聖山

今月のことば 花園、六月号—十一月号

禅語コーナー

同右

●文人書譜9「白隠」(加藤正俊と共著)

淡交社 六月

にごり酒の世界—仏界入り易く魔界入り難し

ナーム 八巻七号 七月

聖一和尚の遺徳のこと—中世漂泊、その七 禅文化九四 九月

神と仏—中国の場合—(仏教思想史1) 平楽寺書店 十一月

京の庭—夢窓と一休—(主婦の友社石川事業財団月報二二二号)

禅の山河を訪ねて 日中臨黄 創刊号 十一月

・横山 俊夫

イギリスからみた日本の『開化』——西洋文明からの距離——(林屋辰三郎編『文明開化の研究』) 岩波書店 十一月

・吉田 光邦

現代のエスプリ

書評・全相運『韓国科学技術史』

月刊京都 六—十一月 東洋史研究 六月

耽書つれづれ

同朋 六、七、九、十月

コラム 日経ビジネス

工芸史散策

華道 六—十一月

陶芸懐愁

太陽 六月

室内室外

室内 七、九、十一月

道具を考える(対談)

スパチオ 九月

江戸時代の生活科学と技術

月刊歴史教育 九月

書評『レコード文化史』

朝日ジャーナル 九月

技術の発展と伝承「土農工商」Ⅲ

八月

草木染雑感

きものと装い 一〇月

●技術文明と宗教

・渡部 徹

座談会・立花隆著『日本共産党の研究』をめぐって(松田道雄

・和田洋一・伊藤晃)

運動史研究 四号 八月

日本経済新聞社 十一月

刊行によせて(『ローカル・ユニオンの源流新産別京滋三〇年
史』序文)

第九一・九二回帝國議會解説(『帝國議會誌』五二・五三卷)

新産別京滋地方連合会 九月
東洋文化社 一〇月・一一月

お客さま

六月六日

中国社会科学院訪日代表団

黎樹氏、任繼愈氏

六月一八日

インド社会科学研究所協議会事務局長

T・N・マダン氏

七月六日

ブルターニュ大学人文学部教授

ジャック・ネレ氏

七月一六日

カリフォルニア大学助教授(中国仏教)

ジェフレイ・ブロートン氏、柳田研究室

で宗密とチベット仏教の問題につき研究

協議。

九月一・九八〇年三月

デンマーク・アルナス大学東アジア研究

所長エルゼ・グライン氏は五カ月間、京

大客員教授として中国建築史の研究に従

事。

九月一〇日

韓国慶北大学校文理科大学教授

宋 就燮氏

九月一七日

ナンテル大学教授

アニー・クリージェル氏

一〇月一三日

スエーデン研究開発調整審議会将来研究

計画委員会委員 ウノ・スヴェーディン氏

一〇月二六日

ストラブール大学教授 P・シャムレ氏

一〇月二九日

ブラジル・ペルナンブーコ国立大学総長

P・F・ド・レゴ・マシエル氏

一〇月三十一日

パリ第七大学副学長

フランソワ・ブルアト氏

一一月三日

敦煌文物研究所々長の常書鴻氏が夫人・
令嬢常沙那氏を同伴して、東方部を訪問。
長広敏雄・藪内清・樋口隆康・林・桑山
・柳田等一〇数名が集り、敦煌石窟の現
況について座談会をひらいた。

一一月一六日

華中師範学院副教授、辛亥革命研究会理

事長 章 開沅氏

一二月一四日

中国社会科学院近代史研究所所長

劉 大年氏

(谷 研究室)

○ Takie Lebra, Prof. of Anthropology

Hawai University, America.

研究集会(研究発表)

○ Michael Moorman, Prof. of Anthro-

pology California University, Ame-

rica. 研究集会(研究発表)

○ Emiko Ohnuki-Tierney, Prof. of

Anthropology, University of Wisconsin, America.

研究集会 (研究発表)

○ Dor Bahadur Bista, Executive Director of Center of Nepal & Asian Studies, Prof. of Anthropology, Tribhuvan University, Kathmandu, Nepal.

情報交換。

○ Harumi Befu, Prof. of Anthropology, Stanford University, America.

情報交換。

計 報

塚本名譽教授は一九八〇年一月三〇日逝去された。

東洋学文獻センター

昭和五十四年度

漢籍担当職員講習会 (初級)

第一日 (九月一七日)

漢籍整理法

参考図書書誌解題

第二日 (九月一八日)

經部書

史部書

第三日 (九月一九日)

釋書について

子部書

第四日 (九月二〇日)

道書について

集部書

第五日 (九月二一日)

江戸時代における京都の書肆—京都出版略史—

実習

第六日 (九月二二日)

討義、情報交換

感銘をつけた本

(アンケート)五十音順

○飯沼二郎

高 史明『一粒の涙を抱きて』毎日新聞社

松浦 玲『横井小楠』朝日新聞社『徳川慶喜』

喜『勝海舟』共に中公新書

森 有正『思索の源泉としての音楽』フィリプス (本でなくレコードですが)。

○田中 淡

朝永振一郎『物理学とは何だろうか』(上下)岩波新書

木村徳国『古代建築のイメージ』NHKブックス

○福永光司

井筒俊彦『神秘哲学』第一部、第二部、人文書院

貝塚茂樹『中国古代再発見』岩波新書

○無名氏

阿部謹也『中世を旅する人びと』平凡社

人

文

第二号

昭和五十五年三月二十五日

京都大学人文科学研究所発行

博文堂印刷

非売品